



フェスティバルのメインプログラムに対するフリンジ（「縁」の意味。一般参加による自主的な催し）の拠点。2006年のフリンジのシンボルは「折り鶴」だった

写真提供：筆者（49, 50ページも同じ）

文化による
都市創造
⑨ アデレード

地域の多文化が 世界の芸術と出会う

——アデレード・フェスティバルの創造性

さ わ だ け い じ
佐和田敬司

早稲田大学法学部助教授

南オーストラリア州で登録された車のナンバープレートには、「フェスティバル・ステート」と書いてある。芸術に興味があるなしにかかわらず多くの人が、南オーストラリア州のシンボルはアデレード・フェスティバル（隔年開催）にほかならないと考えていることがよくわかる。シドニー、メルボルン、パース、ブリスベン、ダーウイン、タスマニアなど、オーストラリアの他の州にもそれぞれ芸術祭はあるが、コミュニティに対してこれほどの重要な文化的意味を持つものは、アデレード・フェスティバル以外ないだろう。

地域の芸術祭から 国際芸術祭への成長◆

アデレードは南オーストラリア州の州都で、セント・ヴィンセント湾とトレンズ川沿いの、人口108万人ほどの都市である。シドニー、ブリスベンなどの主要都市がみな流刑植民地としての起源を持つとは異なり、その日差しに明るさとヨーロッパに似た果実作りに適した土壌に目をつけた自由移民が、1836年に建設した街だ。農業と鉱

業が中心だったこの都市は、他の州都がダイナミックに発展していくのを横目に、文化的に疎外感を感じていた。

欧州の芸術に触れたいという欲求は、オーストラリア全体が欧米の文化的産物に依存しきっていた1950年代に、なおいっそう強くなった。そのころ、アデレード大学の音楽学教授ジョン・ビショップが、地元新聞「アドバタイザー」社長のロイド・ドユマとともに、イギリスのエジンバラ・フェスティバルをモデルとした芸術祭を、アデレードに作ることを構想したのである。

60年に、第1回のフェスティバルが開催され、ビショップは芸術監督も務めた。第1回のプログラムは彼の意向を反映し、シドニー交響楽団やサウスオーストラリア交響楽団など国内の楽団を中心にした6つの交響楽コンサート、9つの独奏会、ジャズコンサート、オペラ『サロメ』など、音楽の充実したものであった。演劇は、アデレードの劇団によるT・S・エリオット『寺院の殺人』など4演目があった。さらにアボリジナルの樹皮画・彫刻展などを含む7つの芸術展、そして現在のフ



さわだ けいじ ● 豪マッコーリー大学博士号取得。多くの豪戯曲上演の翻訳で湯浅芳子賞を受賞。日豪交流年公式事業「ドラマチック・オーストラリア」実行委員長。著書に『現代演劇と文化の混濁—オーストラリア先住民演劇と日本の翻訳劇との出会い』『オーストラリア映画史』など



南オーストラリア州の州都アデレードは人口約108万人、オーストラリアでは5番目の都市。地中海性気候で温暖で過ごしやすい

エスティバルでも続けられている「作家週間」もプログラムに含まれていた。初回はオーストラリアの舞台芸術が中心だったフェスティバルはその後、はじめはヨーロッパから多くの舞台芸術を招へいし、さらにその門戸は欧州以外の世界各地に広げられ、「国際芸術祭」としての性格を色濃くしていた。70年代にはロイヤル・シエークスピア・カンパニー、80年代にはビーター・ブルックやピナ・バウシユ、日本の山海塾など、時代時代を代表する世界の先端の舞台がアデレードに集まり、それがオーストラリアの舞台芸術にも大きな影響を与えていった。さらに、70年代中盤、アデレード駅

と州議事堂の裏手、トレンズ川べりの絶好の場所に、612席のプロセニアム舞台（客席から見て舞台を額縁のように区切る形式の舞台）「プレイハウス」と、350席の円形劇場「スペース」などを擁するアデレード・フェスティバル・センターがオープンし、文字通り芸術祭の「中心」としての役割を果たし始めた。

自主的な催しによるフェスティバルの活性化◆

世界の芸術祭につきものなのが、フリンジ（一般参加による自主的な催し）である。アデレードでは、フリンジはメインのフェスティバルとほぼ同時に始まった。アデレード・フェスティバルの歴史を語る上で、オーストラリアのノーベル文学賞作家であるパトリック・ホワイトの処女戯曲『ハムの葬式』をめぐる出来事は有名である。『ハムの葬式』は、一人の青年の幻想的でグロテスクな思索の旅を扱ったもので、表現主義の影響を色濃く受けた戯曲である。しかし、62年の第2回のフェスティバルは、この戯曲の難解性を理由に、アデレード大学演劇ギルドによる上演を拒否したため、劇団はそれをフ

リンジで上演、作者も上演に立ち会い、多くの観客を集めて成功を収めた。フリンジはこのように、メインからはじかれてしまうラディカルな作品を吸収する役割を担いながら存在し続け、フリンジから生まれた名作も数多い。現在のフリンジは、メインのフェスティバルと同様、州政府と連邦政府からの支援を受けている。メインのフェスティバルより10分の1の予算で、しかもメインのフェスティバルがアーティストを選んで出演料も払うのに対して、フ



アデレード・フェスティバル・センター

アデレードの街頭で
ストリートパフォーマンスを披露する大
道芸人（バスカー）



リングジの場合自主的に集まったパフォーマンス者たちが独立採算で上演を行なうことになる。

このような事情が、「実験的な試みこそリングジで上演する」という役割を失わせつつある。というのも、独立採算のため、必然的にあまり芸術的冒

険のできないコメディショーなどの演目がリングジの多くを占めることになる。一方でフェスティバル本体は、採算をさほど気にせずに、実験的な上演をプログラムに組むことができるからである。

このように時代の変遷とともに役割は変わってしまったが、大学のキャンパスや、繁華街のランドルモール、ウエストエンドを拠点に、郷愁を誘う「見世物小屋」を立て、付近の飲食店と一体になって行なわれるリングジの存在は、アデレードの街全体が盛り上がるために欠かせない存在である。

雰囲気の内静化と 環境の変化◆

フェスティバル本体も、時代とともに変遷を続けている。29歳の若さで96年の芸術監督に就任したバリー・コスキーは、フェスティバルを、国内あらゆる表現者がそこに集結しなければ取り残されてしまうと思うような場所にすると言った。この年のアデレードはおそらく最も人々の記憶に残るものだったかもしれない。この若い芸術監督はアデレードの街中に出没し、コスキーの周りにはいつも人の輪ができ

て、昨夜見た演目について議論をする光景がよく見られた。

そのような光景がいつの間にか街から消え、フェスティバルが生彩を欠いたのは、2002年、アメリカ人のピーター・セラが芸術監督だったときだ。ポスターにヒトラーの肖像を使おうとしたことで混乱が生じてセラは途中降板し、会期は縮小され、集客は著しく不振で、大きな損失を出した。最も新しい06年のフェスティバルでも、コスキーや、98年、00年の芸術監督ロビン・アーチャーらが活躍したころの勢いが無いのは確かだ。

06年は、アデレード・フェスティバルの直後に、メルボルンで「英連邦のオリンピック」であるコモンウェルスゲームが開催され、それに合わせてメルボルンでフェスティバルが開催された影響が大きかった。ストリートパフォーマンスで趣向を凝らしたバスカー（大道芸人）たちが街を練り歩く、かつてのアデレードの定番だった光景が、メルボルンに移動してしまった格好だ。今後、アデレードがどう巻き返しているのかは未知数だ。毎年開催のシドニー・フェスティバルやメルボルン・フェスティバルに対抗して、リングジを

を含め、隔年開催から毎年開催への変更を唱える声もある。

先住民と世界の舞台を並列する◆

アデレード・フェスティバルの歴史にとって重要なのは、先住民の存在だ。先に触れたように、第1回のフェスティバルでもアボリジナルの芸術の展示があったが、先住民が主体的にフェスティバルと関わるようになるには、時間を要した。70年代に先住民系小劇場を率いたボブ・メーザの演出する『基本的に黒』は、すでに76年にフェスティバルの中で上演されていたが、最初のアボリジナルの芸術監督が登場するのは、04年のことだった。それが、先住民系コンテンポラリーダンス・カンパニーであるバンガラ・ダンス・シアターを率いるコレオグラファー（振付師）、ステイーヴン・ペイジである。

この年のアデレード・フェスティバルは先住民の文化や芸術が数多く紹介された。しかしペイジは先住民の芸術一色にしてしまうことは避け、むしろこれまでのフェスティバルが保ってきた国際性を十分考慮し、世界の最先端の舞台芸術がアデレードへ集結し、先

住民を含め地元のアーティストたちと出会うことによって、双方に何かがフールドバックされるべきだという考え方を打ち出した。

ペイジは、フェスティバルのオープニングとして、華やかな行事のかわりに、密やかに伝統的な目覚めの儀式を行なった。夕暮れのトレンズ川の川岸に集い、アデレード周辺のアボリジナル部族の人々とともに

清めの煙を焚き、祖先の精霊たちを呼び起こしたのである。これを手始めに、先住民演劇の若き旗手ウエスリー・イノックと児童劇団ウインドミルによる『リバーランド』や、古代から伝わる伝統的な表現方法でアーネムランド北東のイルカラ部族の霊的な世界を魅らせる『ボディ・ドリミング』、そしてペイジ自身が率いるバンガラ・ダンス・シアターなど、先住民系の演目を、世界から集まった

一流の舞台芸術と並列させた。さらに、オーストラリア映画界の歴史に輝かしい足跡を刻んだアボリジナルの映画俳優ガルピリルの存在も、ペイジのフェスティバルの重要な要素となった。オーストラリア演劇界で最も実力ある演出家、劇作家とのコラボレーションによって作られたガルピリルの一人芝居は、先住民と白人、そして



屋外メディアアート「The People's Portrait」 写真：筆者

アデレードに集まった世界中の人々との対等で実りある対話を観客に印象づけるものとなった。

また、この年のアデレード・フェスティバルと関連しながら行なわれたワールドミュージックの祭典「ウォーマデレード」では、日本からアイヌ系ミュージシャンOKIが出演し、伝統的な楽器トロンコリを現代のポップミュージックと融合させた演奏を聴かせた。またOKIは、アボリジナルのロックバンドとのセッションも行ない、刺激的な文化の出会いを見ることができた。

芸術を通じた過去の歴史との和解◆

ステイヴン・ペイジはまた、「トロン・アップ・カントリー」というタイトルの、オーストラリア全土の先住民コミュニティの芸術と文化のショーケースとなるイベントを開催した。先住民のコミュニティに無料で開放されたこのイベントでは、サウスオーストラリア奥地のピジャンジャジャラ合唱隊による歌も含まれていた。この合唱隊は66年に、ヴィクトリア州でツアーを行ない、評判となっていたものの、第4回アデレード・フェスティバルへ

の参加を拒否され、かわりに教会で歌った、という過去を持つ。このようなフェスティバルの負の歴史を甦らせつつ、現在の合唱隊を舞台に立たせることによって、過去の不幸な歴史との「和解」を求めたと言える。

世界的レベルにあるかないかという類の価値基準で測れない要素が、現代の芸術には存在することをペイジは示した。過去の歴史と向き合い和解をすること、世界と地元の歴史・記憶・文化が互いに影響を及ぼしあいながら交錯することの重要性を、世界的な芸術祭のプログラムを通して示したという点で、この年のアデレードは画期的なものだった。なぜならそれは、世界の一流の芸術を集めることにはかり専心したり、あるいは先住民の芸術をほかの文化から一切切り離して提示しようとする試みとは、明らかに違う地平を切り開くことに成功したからである。

日豪演劇人の創造的な交流と財産◆

アデレード・フェスティバルが果たしてきたもう一つの大きなことに、日豪演劇交流の促進という要素がある。78年には、オーストラリア初となる歌

舞伎公演が、アデレードで行なわれた。これを皮切りに、国際演劇プロデューサー青木道子氏らの活動により、転形劇場、岸田事務所+楽天団、トモエ静嶺と白桃房、第三エロチカ、モレキュラー・シアター、維新派などの日本の現代舞台芸術が、アデレードに参加し、そのたびに大きな反響を巻き起こした。重要なのはこれらの公演が、オーストラリアの観客による一方的な日本演劇の受容だけでは終わらなかったことだ。例えば楽天団を率いる和田喜夫は、その後もオーストラリア演劇にこだわり続け、先住民演劇人たちとのコラボレーションを継続し、真にインターカルチュラルな作品を生み出している。その果実は、06年の日豪交流年公式事業である「ドラマチック・オーストラリア」でも見ることができはすだ。

アデレード・フェスティバルが、今後どのような方向性に向かうのかはわからない。だが、ステイヴン・ペイジの試みや、日本現代演劇との深い関わりなど、このフェスティバルが蓄積してきた財産はとて大きい。この財産を糧として、オーストラリアと世界の芸術祭をリードする存在であり続けるのは、十分に予測できることである。☺